

Title	潜在的な否定をあらわす日本語の接頭辞について：「脱-」「元-」「前-」の事例研究を中心に
Author(s)	久保, 圭
Citation	言語科学論集 = Papers in linguistic science (2011), 17: 113-129
Issue Date	2011-12
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/155036">http://dx.doi.org/10.14989/155036</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 潜在的な否定をあらわす日本語の接頭辞について

— 「脱-」「元-」「前-」の事例研究を中心に —

久保 圭

京都大学大学院

antshavenoborder@gmail.com

## 1. はじめに

本研究では、日本語の接頭辞「脱-」「元-」「前-」について分析をおこない、その意味と共起関係について考察する。これらの接頭辞と日本語の典型的な否定接頭辞「未-」との共通点を提示することにより、「脱-」「元-」「前-」を潜在的な否定をあらわす否定接頭辞として位置づけ、日常言語における否定表現の一種として事例研究をおこなう。

これまでの日本語学における否定接頭辞研究では、ある否定接頭辞と共起する語基の分類について述べられたものが多く、また、その分類法は語基の品詞に着目したものであった。しかしながら、この品詞に基づいた分類のみでは捉えきれない語基が存在する。それをふまえて、筆者は久保 (2010b) において、新たな語基分類の基準となるパラメータの必要性を示唆し、これを提示した。この久保 (2010b) の分類においては、語基の品詞のみに焦点を当てるのではなく、語基があらわす事態と時間性、また価値判断との関係に着目し、Langacker (1987) の動的プロセスの概念と、有光 (2011) の価値的否定性の概念を導入することによって、日本語の典型的な否定接頭辞「不-」「非-」「未-」に加えて「脱-」の分析をおこない、従来の否定接頭辞研究に一石を投じた。

本研究では、まず2節において、従来の品詞に基づいた語基分類についての先行研究を概観し、その問題点を示唆することで、否定研究における本研究の位置づけについて確認をする。3節では、本研究の分析に関わる重要なパラメータとなる動的特性と価値特性について、Langacker (1987) における動的事態 (PROCESS) と静的事態 (STATIVE RELATION) の概念と、有光 (2011) における、対比の概念に基づいて否定性を分類した価値的否定性と対象依存的否定性をそれぞれ引用しながら概観する。4節においては、日本語の否定接頭辞「脱-」を用いた新規的な事例を分析し、それらの表現が容認される動機づけについて考察をおこなうことで、久保 (2010b) の主張を精緻化する。次に、5節では、「元-」と「前-」を用いた事例、とりわけ、職業名と共起する事例を中心に分析をおこなうことにより、その共起関係の差異を動機づける要因について考察をおこなう<sup>1</sup>。また、職業名と共起するその他の接頭辞の分布のなかに「元-」と「前-」を位置づけ、職業名をめぐる接頭辞の広がりについて概観する。最後に、6節では、本研究で述べた内容をまとめ、そこから得られる示唆と、今後の展望と課題について述べる。

## 2 先行研究

本節では、本研究の先行研究とその問題点について述べる。そして、本研究の採用するアプローチが、従来の否定接頭辞研究の枠組みに対してどのような示唆を与えるかについて述べる。

従来の日本語の否定接頭辞に関する形態論的観点からの研究<sup>2</sup>は、分析対象の各接頭辞と共起する語基の分類について述べたものが主であり、それらの研究は品詞を基準として語基の分類をおこなってきた。そのような先行研究のひとつとして、影山 (1993) の「不-」の語基について述べられた部分を以下に引用する。なお、引用内における例文番号は、筆者が本稿に沿った番号に置き換えた。

… また形態論的な観点からは、例えば否定を意味する「不-」が名詞と形容名詞に付くが純粋な形容詞と動詞には付かないことが指摘できる。

- (1) a.        不+名詞：    不人気、不都合、不規則、不道德、不人情、不注意、不手際、不機嫌、不出来、不心得、不行儀、不謹慎、不体裁、不見識、不釣り合い、不似合い、不本意、不品行、不義理、不仲、不快、不慣れ
- b.        不+形容名詞： 不愉快、不可能、不相応、不自然、不活発、不満足、不平等、不必要、不明瞭、不鮮明、不透明、不確実、不名誉、不真面目、不健康、不完全、不確か
- c.        不+形容詞：    \*不うまい、\*不かしこい、\*不えらい、\*不重い、\*不楽しい
- d.        不+動詞：        \*不合う、\*不慣れる、\*不行う、\*不似合う

「不」による接辞化は完全に生産的ではないから、名詞ないし形容名詞であっても、「倫理」に対する「\*不倫理な」や「元気な」に対する「\*不元気な」のように実在しない語が多くある。しかし (1a, b) の例に鑑みると、このような例は、実在はしないものの可能な語として認めるべきであると思われる。(中略) おそらく、両者に共通するのは名詞性という特徴であり、「不-」は名詞性を備えた範疇を選択するものと考えられる。

(影山 1993: 24)

以上、影山 (1993) においても、日本語の否定接頭辞「不-」と共起する語基について、品詞というパラメータを基準として分類をおこなっている。しかしながら、品詞のみを基準とした分類法では、その大まかな傾向をある程度まで説明してはいるが、それだけでは十分に捉えきれていない部分が残っていることも事実である。端的にいうならば、「不-」の語基の分類として提示されている「不+名

詞」や「不+形容名詞」という分類は、漠然とした結論であり、議論の余地が十分に残されているということである。たとえば、この分類に従うならば、「自動車」という名詞を「不-」に後続させた「不自動車」という表現を使用することができるということになる。また、「巨大」という形容名詞を後続させた表現である「不巨大」も、上記の引用において認めるべき事例であるとされている「不倫理」や「不元気」と比較しても、容認度がずいぶん下がるように思われるが、このような表現までを「可能なもの」として認めてよいだろうか<sup>3</sup>。

以上の品詞による否定接頭辞の語基分類では、「不-」が名詞や形容名詞と共起しやすく、形容詞や動詞とは共起しにくいという傾向までは捉えている。しかしながら、名詞や形容名詞であれば、どのような語とも結合するわけではないことは明らかである。品詞による分類においては「可能である」とされる表現のなかにも、容認できそうなものとそうでないものがある。この事実を考慮するならば、「不-」の事例の容認度は、品詞以外のパラメータとの相関によるグレイディエンスのなかで規定されていると考えるほうが妥当である。

そこで、筆者は久保 (2010b) において、語基分類の新たなパラメータとして、動的プロセスと価値判断を設定し、その観点から日本語の否定接頭辞を分析した。そして、「不-」についての分析において、「不健康」「不得意」「不確実」などのように、共起する語基の多くが静的な状態をあらわし、肯定的な価値をもつことを示した。これは、従来の否定接頭辞研究における品詞を基準とした分類によって得られた語基の傾向に対して、さらに細やかな分類の可能性を示唆するものである。

### 3. 動的特性と価値特性

本節では、本研究において分析の主なパラメータとなる動的特性と価値特性について概観する。動的特性については、Langacker (1987) から動的プロセスの概念を、価値特性については、有光 (2011) から価値的否定性と対象依存的否定性の概念をそれぞれ引用して説明する。

#### 3.1 動的特性

本研究では、ある語のあらわす状態が時間的推移によって別の状態へと展開していくとき、その状態の変化を「動的特性」として定義する。図1は、動的特性のイメージについて示したものである。



図1：動的特性のイメージ

Langacker (1987) では、複数の存在 (entity) の間に成立する関係 (relation) が、動的なプロセスによって特徴づけられる場合には、時間軸をあらわす矢印  $\rightarrow$  によってこれを示し、時間的推移に沿って事態が動的に展開していく様子をあらわした。また、時間的な展開がプロファイルされる事態を動的な事態 (PROCESS) として、プロファイルされない事態を静的な事態 (STATIVE RELATION) として位置づけ、定義している。

3.2 価値特性

本研究においては、ある語が価値判断に関わるものをあらわす場合に、その語と価値判断との関係性を価値特性として定義する。価値特性は「肯定的価値」と「否定的価値」の二つに分けられ、そのそれぞれが「語彙内在型価値」と「文脈依存型価値」とに分けられる。「肯定的価値」は望ましい価値を、「否定的価値」とは望ましくない価値を指している。次に、「語彙内在型価値」とは語にはじめから内在している価値を指し、「文脈依存型価値」とは、ある語が文脈のなかに組み込まれることによって初めて立ちあらわれる価値を指している。以下の表は、価値特性の組み合わせを示したものである。

表 1：価値特性の組み合わせのパターン

	語彙内在型	文脈依存型
肯定的価値	語彙内在型肯定的価値	文脈依存型肯定的価値
否定的価値	語彙内在型否定的価値	文脈依存型否定的価値

本節では、価値特性に関する説明として、有光 (2011) の価値的否定性と対象依存的否定性の概念を引用する。有光 (2011) における価値的否定性は、表 1 の「語彙内在型否定的価値」に相当し、また、対象依存的否定性は「文脈依存型否定的価値」に相当する。

有光 (2011) では、対比の概念に根ざした否定性を「価値的否定性」と「対象依存的否定性」の二つに分類して考察している。以下に、価値的否定性の定義を引用する。

筆者が「価値的否定性」と呼ぶものは、すでに語それ自体が、否定的な意味を有している事例を指している。その語が文の一部となることのない段階で、すでに否定的な意味を有している。名詞の場合、動詞の場合、形容詞・副詞等の場合など、さまざまな場合を想定できる。

(有光 2011: 69)

価値的否定性を有している事例には、以下のようなものがある（以下に挙げている例は、すべて有光 (2011: 70-72) からの抜粋）。なお、丸括弧内は、その対比となる語である。

名詞： 死(生)、病(健康)、善(悪)、心配(安心)、地獄(天国)

動詞： 死ぬ(生きる)、負ける(勝つ)、失う(得る)、憎む(愛する)

形容詞： 悪い(良い)、誤った(正しい)、難しい(簡単な)、苦手な(得意な)

副詞： わずらわしい(容易な)、あくせく(のんびり)、くどい(あっさり)

また、有光(2011)によれば、対象依存的否定性は以下のように定義されている。

価値的否定性を持つ事例に対し、対比という点においては類似しているが、性質の異なる非明示的否定性が存在している。これを本書では対象依存的否定性と呼ぶ。(中略) 対象依存的否定性は、対象となる語によって、否定性を持ったり、持たなかったりする。

(有光 2011:72)

対象依存的否定性を有している事例には、以下のようなものがある。これらの例文において、「小さい」「低い」「浅い」といった語自体が肯定性・否定性を有しているのではなく、それぞれの文における対象、つまり「肝っ玉」「評価」「考え」と結びつくことによって否定性を有しているとされる。

- (2) 若者の夢は大きい。／あの男は肝っ玉が小さい。
- (3) 可能性が高い。／評価が低い。
- (4) 読みが深い。／考えが浅い。

(有光 2011:73 から抜粋、例文番号は筆者による)

#### 4. 事例研究Ⅰ：「脱-」

本節では、3 節で紹介した動的特性と価値特性の概念に基づいて、日本語の接頭辞「脱-」の分析と考察をおこなう。まず、4.1 節では、「脱-」の先行研究として久保(2010b)を概観する。次に、4.2 節では、「脱-」の新規的表現について分析をおこなう。最後に、4.3 節において、そのような表現がなぜ容易に容認されるかについて考察をおこない、その動機づけを明らかにする。

##### 4.1 「脱-」の概観

ウェブ上においてみられる「脱オタク」という表現は、オタクという状態を脱した状態、つまり「オタクでない状態」をあらわしている。それは同時に、「過去にオタクであった状態」を含意することになり、その状態から「現在のオタクでない状態」への状態変化があったことが推論として導き出される。このように、日本語の接頭辞「脱-」は、ある状態 A から別の状態 B への時間的推移による状態変化をその意味に含んでいるという点において、動的特性をもつということができる。以下の

図2は、上記の「脱オタク」という表現の意味を示したものである。

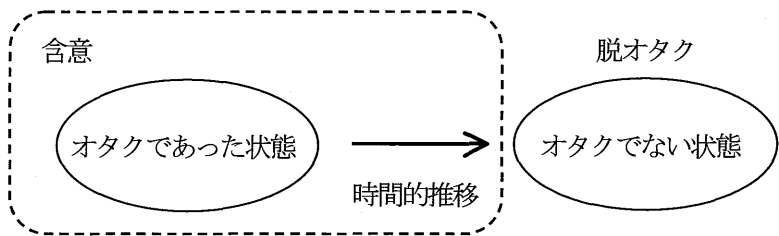


図2：「脱オタク」のイメージ

これは日本語の典型的な否定接頭辞である「未-」にも同じことがいえる。たとえば「未完成」という表現は、完成していない状態をあらわすものであるが、同時に「これから先に完成する」ということを含意している。つまり、「完成していない状態」から「完成した状態」への状態変化がその意味に組み込まれている。以上により、「未-」と「脱-」のそれぞれがもつ意味には、時間的推移による状態変化が含まれていることがわかる。しかし、ここで指摘しておきたいのは、「未-」が「ある状態から別の状態へと入っていく」タイプの状態変化をあらわしているのに対して、「脱-」は「ある状態から別の状態へと出ていく」タイプの状態変化をあらわすものであり、この点においては大きく異なっているといえる。図3は、「未完成」という表現の意味を示したものである。図2と比較すると、「未-」と「脱-」が、表現があらわす状態と別の状態を含意している点において同じであることがわかる。

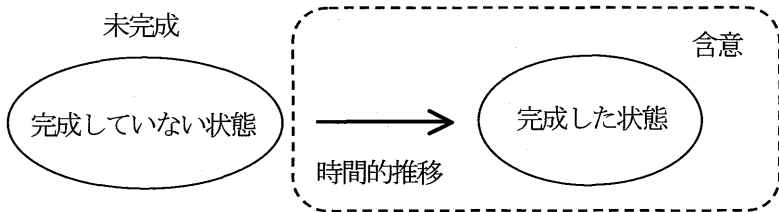


図3：「未完成」のイメージ

また、日本語の接頭辞「脱-」を用いた表現は、小説などのいわゆる書きことばの中ではあまりみられないが、ウェブ上などでは確認されることから、比較的新規的なものであるといえる。具体的な事例<sup>5</sup>としては、以下のようなものが挙げられる。

- (5) 脱オタク、脱温暖化、脱カルト、脱高血圧、脱どん底、脱ニート、  
脱パソコン初心者、脱貧困、脱三日ぼろず、脱メタボリック、など

久保 (2010b) は、「脱-」が「未-」と同様に動的特性に関わる接頭辞であることから、これを否定接頭辞として位置づけ、また、「脱-」と共起する語基には、価値判断的に望ましくない状態をあらわすものが多いことを指摘した。価値特性の観点から換言すると、(5) の語基は語彙内在型の否定的価値をあらわしているといえる。

## 4.2 「脱-」の事例分析

本節では、久保 (2010b) の主張をふまえて、日本語の否定接頭辞「脱-」の新たな事例について事例分析をおこなう。

ウェブ上からのさらなるデータ収集の結果、以下のような「脱-」の事例が確認できた。

- (6) a. 近頃は脱原発を推進する声が多い。
- b. 脱オレンジジュースで糖質の摂取を抑えよう。
- c. 脱チョコレートでダイエット宣言！
- d. 冬の京都は底冷えするから、なかなか脱こたつできない。
- e. 今度の人事は脱小沢の路線で決まるだろうか。

以上のように、「脱-」の語基として、建物の名称である「原発」や、「オレンジジュース」「チョコレート」のような飲食物、そして家具である「こたつ」、さらには「小沢」のような人名と共起する事例もみられた。

ここで大きな特徴として挙げられるのは、(6) の事例の語基が、(5) に挙げた事例の語基である「メタボリック」や「温暖化」のように、人や物事の状態をあらわすものでないということである。よって、これらの事例は「脱-」の用法の広がりを示す事例として位置づけることができる。

また、語基の指すものが比喩的に解釈されるという点においても、(5) とは大きく異なっている。たとえば、「脱原発」という表現は、「建物としての原子力発電所から脱出する」という意味をあらわすものではない。ここで「原発」という語基が指しているのは、「原子力発電所がもたらしている状態」であり、その意味は、比喩を介することで理解される。また、語基があらわしている状態は総じて価値判断的に望ましくないものであり、この点においては (5) の事例と同じである。

## 4.3 「脱-」の考察

4.2 節で述べたように、(6) の事例の語基として、価値判断的に望ましくないものが共起している点は (2) と同様である。しかし、その価値判断の決定に際しては、(2) にくらべて文脈依存的な解釈がより必要となる。つまり、「オレンジジュース」という語に否定的価値が備わっているのではなく、「過度の糖質摂取がもたらす人体への悪影響」という背景的知識が文脈によって顕在化された場合に、



この「オレンジジュース」は価値判断的に望ましくないものとして解釈され、「脱-」の語基として共起が可能になるということである。また、「こたつ」という語基についても、単に冬場の暖房家具としての解釈がなされるのであれば、本来は人間に恩恵を与えるものであるが、「暖かさによる快適さがもたらす不必要な長居と、その結果としての時間的浪費」という否定的なイメージが文脈によって喚起される場合には、「こたつ」は望ましくないものとして解釈されることになる。言い換えるならば、この「脱-」の語基は文脈依存型の否定的価値をもつといえる。

つまり、(6) のような事例が容認される背景には、語基のあらわすものが「依存の対象」となり得るかどうかに関係していると考えられる。つまり、「脱 X」の X という表現が、「X のあらわすものに依存している状態」を指しており、その依存の状態が望ましくないということが比較的容易に推論可能である場合、これらの表現は容認されると考えられる。

#### 4.4 まとめ

以上により、日本語の否定接頭辞「脱-」を用いた表現、(5) と (6) の共通点と相違点について、以下のようにまとめることができる。

- |           |  |
|-----------|--|
| (7) 【共通点】 | ① 動的特性をもつ：「状態 A から状態 B へと出ていく」タイプの状態変化を含意することによって、潜在的な否定をあらわす<br>② 価値特性をもつ：語基が否定的価値をもつ     |
| 【相違点】     | (5) の事例    語基の意味解釈：比喩を介さない<br>語基の価値解釈：語彙的内在型<br>(6) の事例    語基の意味解釈：比喩を介する<br>語基の価値解釈：文脈依存型 |

### 5. 事例研究Ⅱ：「元-」と「前-」

本節では、まず、5.1 節で日本語の接頭辞「元-」と「前-」が動的特性をもつことを示し、これらが否定接頭辞として位置づけられることを提示する。5.2 節では、「元-」と「前-」を用いた表現、とりわけ、職業名が語基として共起している事例について分析をおこない、その共起関係の差異について確認をおこなう。そして、5.3 節でその共起関係の差異を動機づける要因を考察によって明らかにする。

#### 5.1 「元-」と「前-」の概観

日本語の接頭辞である「元-」と「前-」が、さまざまな職業名と共起した形で用いられることは一

般的によく知られている。以下の (8) と (9) は、その一例を挙げたものである。

(8) 彼は元 {首相／大統領／大臣／議長} だ。

(9) 彼は前 {首相／大統領／大臣／議長} だ。

上記の「元」と「前」に職業名が共起した事例は、すべて「過去の時点において首相（あるいは大統領／大臣／議長など）の職に就いていた」という意味をあらわすが、同時に「現在は首相（あるいは大統領／大臣／議長など）の職に就いていない」といった含意をもつ。この過去と現在での二つの状態をその意味に含んでいるという点において、「元」と「前」は動的特性をもつ接頭辞であるといえる。これにより、「元」と「前」は「脱」と同様に、潜在的な否定をあらわす否定接頭辞として位置づけることが可能となる。

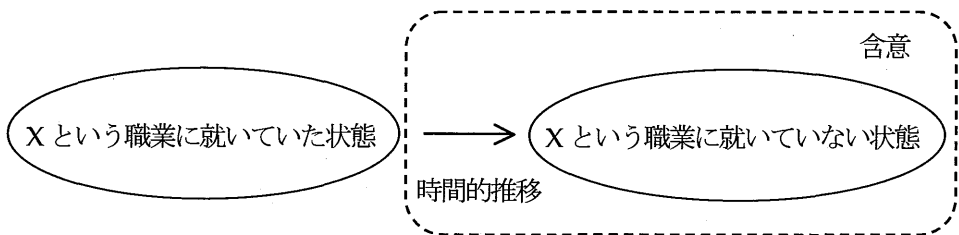


図4: 「元」「前」のイメージ

しかし、「元」はあらゆる職業名と共起可能であるのに対して、「前」は一部の職業名と共起することができない。そのことは以下の (10) と (11) から明らかである。

(10) 彼は元 {医者／教師／サラリーマン／エンジニア} だ。

(11) 彼は前 {\*医者／\*教師／\*サラリーマン／\*エンジニア} だ。

では、上記のような「元」と「前」の職業名との共起関係の差異は、どのような要因によって生じているのだろうか。

まず、日本語における空間・時間語彙としての「まえ」の記述がみられる先行研究としては、工藤 (1985)、渡辺 (1995)、国広 (1997) が挙げられる。また、檜和 (1998)、碓井 (2001)、篠原 (2002) においては、認知言語学の観点から「まえ」の考察をおこなっている。また、本研究とは直接の関連はないが、「さき」と「まえ」の用法の違いについては、多くの議論と主張がなされている。

たとえば、国広 (1997) では、「さき」の多義を「指のさき」などの形態的意味、「行くさき」などの位置的意味、「それはまださきの話です」などの〈未来〉、「私がさきに来ました」などの〈順序〉

という時間的意味に分けられ、特に《順序》の「さき」は、時間的には《過去》をあらわすこともあり、《未来》の意味と矛盾するように見えるといった、「さき」の多様な意味について、一つの現象素と視点の位置の組み合わせを用いた説明を試みた。そのなかで「まえ」は、過去をあらわす「さき」の類義語としての「まえ 1」と、未来をあらわす「さき」の対義語としての「まえ 2」に区別されている。

- (i) 私がさきに着きました〈過去〉
- (ii) バスは10分前に出ました〈過去〉
- (iii) それはずっとさきの話です〈未来〉
- (iv) それはずっとまえの話です〈過去〉

しかし、先行研究のなかで、日本語の接頭辞としての「前-」を扱ったものはない。また、日本語の接頭辞「元-」に関する先行研究も、管見の限りにおいて見当たらない。よって、日本語の接頭辞「元-」と「前-」における職業名との共起関係について触れている先行研究はないと考えられる。

5.2 「元-」と「前-」の事例分析

本節では、「元-」と「前-」の事例分析をおこなうことで、各接頭辞の共起関係の傾向を明らかにする。まず、分析に用いた職業名のデータは、主に Wikipedia の項目「職業一覧」から収集した<sup>6</sup>。収集した職業名の全事例数は 211 例であった。次に、これらの事例に対して、その職業名が「元-」や「前-」と共起可能かどうかを調べてタグづけをおこなった。以下の図 5 は、その数量的な結果を示したものである。

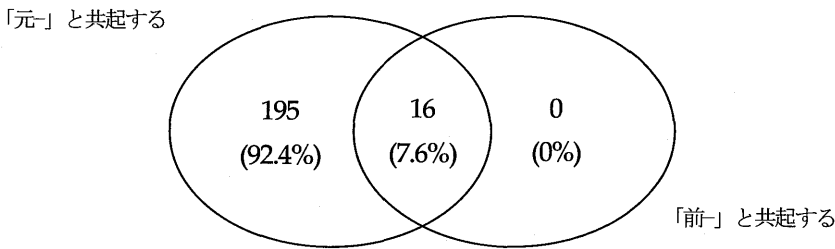


図 5：日本語の接頭辞「元-」と「前-」の職業名との共起関係

上図では、左側の楕円が「元-」と共起する事例数を、右側の楕円が「前-」と共起する事例数をあらわしている。全 211 例を分析した結果、「元-」のみと共起する事例は 195 例で、「前-」のみと共起する事例は 0 例であった。また、「元-」と「前-」の両方と共起可能な事例は 16 例であった。以下の

(12) と (13) にその一例を挙げる。

(12) 「元-」と共起するが、「前-」とは共起しない職業名

板前、歌手、芸人、公務員、作家、詩人、小説家、職人、スポーツ選手、ソムリエ、大工、通訳、花屋、バレエダンサー、フリーター、漫才師、モデル、漁師など

(13) 「元-」と「前-」の両方と共起可能な職業名

アナウンサー、監督、教官、司会者、ニュースキャスター、ラジオパーソナリティー、ディレクター、デザイナー、ナレーター、内閣総理大臣、プロデューサー、編集者、放送作家など

ここで注目すべきなのは、「元-」は収集したすべての職業名と共起可能である一方で、「前-」と共起可能な事例はかなり少ないということである。この事実から、「前-」と共起可能な職業名は、何らかの特徴を持つものであると考えられる。

### 5.3 「元-」と「前-」の考察

本節では、「元-」と「前-」の共起関係の差異を動機づける要因について考察する。

以下の (14) と (15) は、「元首相」と「前首相」という表現がどの人物を指すことができるかを示す例文である。なお、これらの例文における容認度の判定は、2011 年 11 月 30 日時点において有効である。

(14) {菅直人／鳩山由紀夫／小泉純一郎／中曽根康弘} は日本の元首相だ。

(15) {菅直人／\*鳩山由紀夫／\*小泉純一郎／\*中曽根康弘} は日本の前首相だ。

上記の例から、「元首相」という表現は、かつて首相を歴任した人物であれば、そのすべてを指すことが可能であるが、「前首相」という表現は、現職の一つ前の人物（2011 年 11 月 30 日の時点では菅直人）のみを指すことがわかる。このことは、(9) の首相以外の事例（大統領、大臣、議長）についても当てはまる。このことにより、(9) や (13) で挙げた職業名に共通する条件が、「前-」の共起関係を決定していると考えられる。以上により、(14) と (15) により、「前 X」という表現が指すことができるのは、一つ前の事例のみであるのに対して、「元 X」という表現は、一つより前の事例すべてを指すことが可能であることがわかる。

次に、(9) や (13) で挙げた職業名において、以下がその特徴として考えられる。

(16) 定員（一人でも複数人でもよい）をもつ

たとえば、「前首相」という表現について、日本における現職の首相の定員は常に一人であり、この値が変わることはない（首相が二人以上いることは通常あり得ない）。一方で、「前医者」や「前サラリーマン」という表現が容認されない理由は、「医者」や「サラリーマン」という職業には「定員がある」という事態が想定されにくいためである。

本研究では、(16) の特徴に該当する職業名（首相、大統領、大臣、議長など）を「地位名」として、また、該当しない職業名（医者、教師、サラリーマン、エンジニアなど）を「非地位名」として下位分類する。これにより、日本語の接頭辞「元-」と「前-」の職業名との共起関係について、以下のようにとめる。

- (17) 日本語の接頭辞「元-」は、地位名と非地位名の両方と共起可能である
- (18) 日本語の接頭辞「前-」は、地位名とのみ共起可能である

5.4 職業名と共起する接頭辞の広がり

本節では、職業名と共起可能な接頭辞の分布について概観する。そのなかに「元-」と「前-」がどのように位置づけられるかを観察する。以下の図 6 は、5.1 節から 5.3 節で述べた内容を図示したものである。

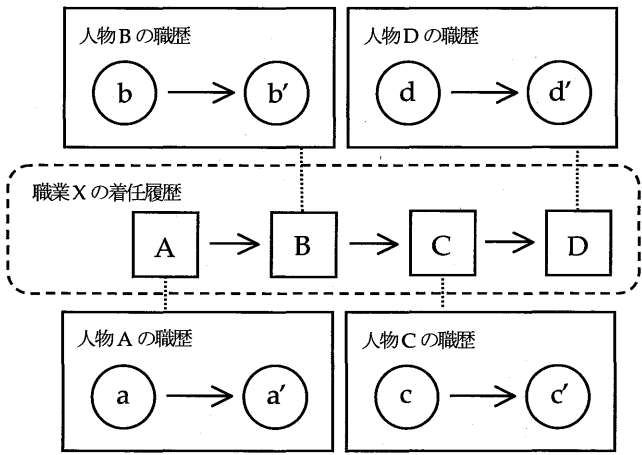


図 6：定員のある職業と個人の職歴との関係

まず、図の中央付近の破線で囲まれた部分は、職業 X の着任履歴をあらわしている。時間軸に沿って、定員がある職業（首相、大統領、大臣など）に人物 A、人物 B、人物 C、人物 D が順に入れ替わりで着任していく様子を示している。便宜上、A から D の四名の人物を描いているが、A より過去の時点に他の人物が存在しても良いし、同様に、D の後にもさらに他の人物が着任する可能性もある。

そして、A から D のそれぞれから点線（この点線は対応をあらわすこととする）が伸びており、それぞれ【人物 A～D の職歴】につながっている。また、そのなかの小文字【a～d】と【a'～d'】は職業をあらわしている。たとえば、「人物 A の職歴」の部分では、人物 A が職業 a から職業 a' になることをあらわしている。こちらも便宜上は a と a' の二つのみになっているが、当然、a の前に就いていた職業があっても良いし、a' の後に就く職業があっても良い。

つまり、上図の主旨は、定員をもつ職業 X に入れ替わりで着任する人物のそれぞれにも、個人的な職業の履歴がある（可能性が高い）ということにある。

これをふまえて、図 7 では、今回の発表で分析対象として扱った「元」と「前」と、職業名と共に起すと考えられるその他の接頭辞「現」「新」「ポスト」「次期」との関係のなかで、その位置づけを詳しくみていくことにする。

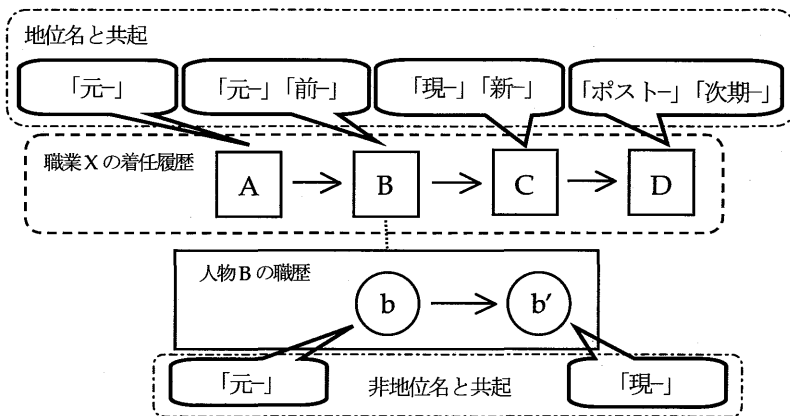


図 7: 職業名に関わる接頭辞の分布

まず、定員をもつ職業 X を首相と仮定して、さらに人物 C をその現職「現首相」または「新首相」とする。これにより、人物 B は人物 C のひとつ前（過去）の首相「前首相」あるいは「元首相」となり、人物 A はふたつ前（過去）の首相「元首相」となり、また、人物 D はひとつ先（未来）の首相「ポスト C」や「次期首相」として位置づけられる。地位名・非地位名との共起関係については、一点鎖線で囲ってある通り、職業 X の着任履歴に関わる場合の接頭辞は地位名と、個人的な職業履歴に関わる場合の接頭辞は非地位名と共起する。

## 5.5 まとめ

本研究では、日本語の接頭辞である「元」と「前」について、とりわけ、職業名と共に起す事例を分析し、考察をおこなった。まず、「元」と「前」の各表現について分析をおこなうことにより、

「前 X」という表現が指すことができるのは、一つ前の事例のみであるのに対して、「元 X」という表現は、一つより前の事例すべてを指すことが可能であることを示した。次に、その共起関係の差異を動機づける要因についても考察し、「前-」の共起関係に関わる条件が「定員よりも多い成員を持たない」であることを提示した。最後に、その条件を基準とした職業名の下位分類をおこない、「地位名」と「非地位名」を設定することで、日本語の接頭辞「元-」と「前-」の職業名との共起関係について整理をおこなった。また、「現-」「新-」「ポスト-」「次期-」など、職業名と共起可能な他の接頭辞と「元-」「前-」との分布を観察することにより、定員がある職業の着任履歴に関わる接頭辞と、個人的な職歴に関わる接頭辞の棲み分けを示した。

6. おわりに

本研究では、日本語の否定接頭辞を用いた表現について、動的特性と価値特性の観点から分析をおこなった。動的特性の観点から、接頭辞「脱-」が日本語の典型的な否定接頭辞である「未-」と類似した表現であることを指摘し、これを潜在的な否定接頭辞として位置づけた。また、「脱-」の新規的用法についても考察をおこない、それらが容認される動機付けについて明らかにした。また、「元-」と「前-」の職業名と共起する事例についても分析をおこない、その用法の差異を動機づける要因についても考察した。以上の本研究の内容について、「未-」「脱-」「元-」「前-」の体系的な分類を表 2 にまとめた。

表 2：本研究で扱った否定接頭辞の体系的分類

	「未-」	「脱-」	「元-」	「前-」
動的特性	+	+	+	+
価値特性	+	+	-	-
肯定／否定 <sup>7</sup>	positive	negative		
定員 <sup>8</sup>			-	+

言語学における否定研究は、論理学における命題の真と偽を反転させる二値的な演算的否定に基づいておこなわれている部分が少なくないが、上表の否定接頭辞がもつ意味の多様性を鑑みても、否定のあらわす様式は論理的な否定のみでは十分に説明できないことがわかる。

今後の課題として、まず、本研究の分析対象として扱った「脱-」「元-」「前-」などの動的特性をもつ接辞、つまり潜在的な否定をあらわす接辞として位置づけられる接辞を多く観察することで、否定の多様性を明らかにすることが挙げられる。

次に、「元-」と「前-」についての課題としては、職業名以外の語基との共起関係を調査すること

が挙げられる。本研究では、分析対象とする語基を「職業名」に限定しているが、「前-」の事例には「前首相官邸」や「前天皇誕生日」などの事例も存在する。これらの事例については詳しく言及していないが、本研究で提示した「地位名」や「非地位名」のように、語基を下位分類する際の用語については、今後再検討する。また、今回は扱うことができなかった他の日本語の接頭辞「先-」「現-」「ポスト-」などの分析・考察と、その結果をまとめた体系的な記述をおこないたい。

## 注

1. 5節における内容は、久保・田口(2011)の内容の一部を含んでいる。
2. 日本語の否定接頭辞を扱った主な研究としては、相原(1986)、野村(1973)、奥野(1985)、サト一他(1982)、須山(1974)、吉村(1990)などが挙げられる。
3. なお、「不自動車」「不巨大」「不倫理」「不元気」は、Sketch Engine による検索では、すべてヒット数が0件であった。
4. 認知図式において、通常、時間軸はt(time)がついた矢印によってあらわされる。
5. 本研究で挙げる「脱-」の事例は、すべてGoogleによる検索を用いて収集した。
6. Wikipedia「職業一覧」のページURL  
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%81%B7%E6%A5%AD%E4%B8%80%E8%A6%A7>
7. 表内の「肯定／否定」は、該当する接頭辞が価値特性に関わるものである場合に、共起する語基が肯定的価値と否定的価値のどちらをもつかを示している。
8. 表内の「定員」は「元-」と「前-」に限定して用いるパラメータであるが、その語基として共起する職業名が、(16)で述べた定員をもつものであるかどうかを示したものである。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、黒田航氏(早稲田大学 総合研究機構 招聘研究員)には、貴重なご助言を戴くとともに、内容の細部にわたってご指導を戴いた。ここに深謝の意を表する。また、田口慎也氏(京都大学大学院人間・環境学研究科 博士課程)と、木本幸憲氏(京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士課程)には、有益なコメントを戴いた。ここに両氏に対して感謝の意を表する。

## 参考文献

- 相原林司. 1986. 「不- 無- 非- 未-」『日本語学』5(3): 67-72.
- 有光奈美. 2004. 「否定の意味から行為へ: 対象依存的否定性と価値的否定性」『日本語用論学会予稿集』7: 9-12.
- 有光奈美. 2006. 「日・英語の対比表現と否定のメカニズム - 認知言語学と語用論の接点」京都大学



人間・環境学研究科 博士論文.

有光奈美. 2007. 「空間概念に基づく英語接辞の認識とイメージスキーマ」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』7: 131-146.

有光奈美. 2011. 『日・英語の対比表現と否定のメカニズム』東京: 開拓社.

崔春浩. 2004. 「"Negation" とカテゴリー認知」『日本語用論学会予稿集』7: 5-8.

深田智・仲本康一郎. 2008. 『概念化と意味の世界』東京: 研究社.

Horn, Laurence R. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.

出口雅也. 2004. 「"Negation" と "Negative evaluation"」『日本語用論学会予稿集』7: 1-4.

伊藤たかね・杉岡洋子. 2002. 『語の仕組みと語形成』東京: 研究社.

ジョン・R. テイラー、瀬戸賢一. 2008. 『認知文法のエッセンス』東京: 大修館書店.

影山太郎. 1993. 『文法と語形成』東京: ひつじ書房.

影山太郎. 2001. 『日英対照 動詞の意味と構文』東京: 大修館書店.

久保圭. 2010a. 「日本語の否定接頭辞に関する認知言語学的分析」京都大学 人間・環境学研究科 修士論文.

久保圭. 2010b. 「否定表現に関わる動的プロセスと価値判断について —日本語の否定接頭辞を中心に—」『言語科学論集』16: 57-77.

久保圭. 2011. 「日本語の否定接頭辞の体系的分類 —価値特性と動的特性の組み合わせによる記述—」『日本認知言語学会予稿集』12: 123-126.

久保圭・田口慎也. 2011. 「日本語の接頭辞「元-」と「前-」について —職業名との共起関係を中心に—」『日本語文法学会予稿集』12: 153-158.

工藤浩. 1985. 「日本語の文の時間表現」, 『言語生活』6: 48-56.

国広哲弥. 1997. 『理想の国語辞典』東京: 大修館書店.

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of cognitive grammar*. Vol. 1, Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of cognitive grammar*. Vol. 2, Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.

益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法 改訂版』東京: くろしお出版.

水野義道. 1987. 「漢語系接辞の機能」『日本語学』6(2): 60-69.

檜和千春. 1998. 「方向認識の非対称性とことばの意味と拡張: 「まえ」を中心に」『ことばと文化』2: 94-116.

西川盛雄. 2006. 『英語接辞研究』東京: 開拓社.

野村雅昭. 1973. 「否定の接頭語『無・不・未・非』の用法」『国立国語研究所論集 ことばの研究』4: 31-50.

太田朗. 1980. 『否定の意味 —意味論序説』東京: 大修館書店.

- 奥野浩子. 1985. 「否定接頭辞「無・不・非」の用法についての一考察」『月刊 言語』14(6): 88-93.
- サトー アメリア・川崎晶子・ソーニア ロンギ. 1982. 「語頭の位置にある否定的な意味をもつ造語要素「無・不・未・非」の意味と使われ方」『日本語と日本文学』2: 1-10.
- 篠原和子. 2002. 「時間メタファーにおける「さき」の用法と直示的時間解釈」, 篠原和子・片岡邦好(編)『ことば・空間・身体』179-211. 東京: ひつじ書房.
- 城田俊. 1998. 『日本語形態論』東京: ひつじ書房.
- 須山奈保子. 1974. 「接辞「不」「無」をめぐって」『学習院大学国語国文学会誌』17: 19-28.
- 田村泰男. 2005. 「現代日本語の接頭辞について」『広島大学留学生センター紀要』15: 25-36.
- 上原聡・熊代文子. 2007. 『音韻・形態のメカニズム』東京: 研究社.
- 碓井智子. 2001. 「空間認知表現と時間認知表現 ―日本語マエとサキの認知言語学的考察―」京大大学人間・環境学研究科 修士論文.
- 渡辺実. 1995. 「所と時の指定に関わる語の幾つか ―意味論的に―」『国語学』181: 18-29.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』東京: ひつじ書房.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京: くろしお出版.
- 山梨正明. 2009. 『認知構文論 ―文法のゲシュタルト性―』東京: 大修館書店.
- 吉村あき子. 1999. 『否定極性現象』東京: 英宝社.
- 吉村弓子. 1990. 「造語成分「不・無・非」」『日本語学』9(12): 36-44.
- 鄒善軍. 2005. 「日本語の「不」と中国語の「不」 ―接頭辞を中心に―」『人間社会学研究集録』1: 135-147.

## 辞書

- 鎌田正・米山寅太郎(著) 2001. 『漢語新辞典』東京: 大修館書店.
- 佐藤進・濱口富士雄(編) 2006. 『全訳 漢辞海 第二版』東京: 三省堂.
- 諸橋轍次(著) 1989. 『大漢和辞典 修訂第二版』東京: 大修館書店.

## コーパス

- 新潮社. 1995. 『新潮文庫の100冊 CD-ROM版』東京: 新潮社.
- Sketch Engine (<http://www.sketchengine.co.uk/>)